

2026年度 住宅地盤主任技士（設計施工部門） 正解および解説

問題	正解	解 説
1	2	設問2：潟湖は海の一部が外海と切り離されてできたもので、河道変化によるものではない。
2	1	設問2：物理的風化と化学的風化の説明が逆である。設問3：堆積物が固結し堆積岩へ変化していく作用を続成作用という。設問4：土粒子の沈降速度は、土粒子の大きさで異なる。
3	1	設問1：未分解で繊維質のものを泥炭、分解が進み黒色のものを黒泥に小分類する。
4	2	設問2： $e \sim \log p$ 曲線の正規圧密領域における勾配は圧縮指数 C_c である。
5	1	設問1：リスクコミュニケーションの結果、積極的な対策をせずとも安全かつ液状化後の修復費用などを受容する場合もある。
6	3	設問1：標高 38～40 m の等高線の間に位置することから切土である。設問2：切土側も地盤改良を行って同一層で支持させるという断定は不適。設問4：盛土荷重による沈下量は 盛土厚が大きい南側の方が大きいので、「北側に向かって沈下が生じる」という説明は誤り。
7	3	A, B, D が「主に雨水の浸入に起因する沈下」に該当する。
8	2	設問2： $V \cdot \mu$ は擁壁底版と基礎地盤の間の摩擦抵抗を表すもので粘着力ではない。
9	4	設問4：流動性が高く、柔らかいことを意味する。
10	3	設問3：新しい造成地では切盛土の判別はできず、造成計画図を基にしないと把握できない。
11	2	設問1：支持地盤の層厚確認は困難である。設問3：有機質土の層厚確認は困難である。設問4：盛土自体の性状を把握するのは難しい。
12	4	設問1：圧密試験には利用できない。設問2：打撃回数を測定後、静的圧入でなくロッドを回転させて周面摩擦の影響を補正する。設問3：先端抵抗、周面摩擦、間隙水圧を測定する。
13	2	設問1：地盤沈下の恐れがある場合は適さない。設問3：盛土下部軟弱層の圧密沈下も考慮しする必要がある。設問4：支持層が急傾斜している地盤での施工は、通常施工は適さない。
14	3	設問3：建設前の「全上載圧」を用いるのは誤り。
15	1	設問1： c は改良地盤のせん断強度 ($F_c/2$) である。
16	4	設問4：個々の供試体が全て設計基準強度以上であることを確認する。
17	4	設問4：改良径 600mm を用いる場合は、接円配置でなく、ブロック配置で対応する。
18	2	設問2： $4 \times (\text{攪拌翼枚数}) \times 40 \times (\text{軸回転数}) \times (1+1+1+1) \times (\text{滞在時間}) = 640 \text{ 回/m}$
19	1	設問2：基準強度は 235 N/mm^2 である。設問3：細長比による低減は、杭長を鋼管直径で除した値が 100 を超える場合に考慮する。設問4：鋼管先端から上下 $1D$ ($1D_w$) の平均 N 値。
20	3	設問3：ルート間隔が狭すぎると溶け込み不良などの原因となる
21	4	設問4：設計支持力の 2 倍を確認するためには 2 倍の機械重量では確認できない。
22	1	設問1：必ず撤去しなければならないわけではない。
23	3	設問3：移動式クレーンの運転には、つり上げ荷重により必要とする資格が区分されている。
計 算 問 題		解答 6.3/1000
記 述 問 題		・技術文章として構成が不十分な場合は、内容に応じて減点とする。 ・専門用語を含む誤字・脱字がある場合は、内容に応じて減点とする。 ・「耐圧版工法・鋼管圧入工法」の 2 工法について論述すること。1 項目のみの論述は減点対象とする。